終戦記念
もう戦争は無いよね…

現在日本では、天皇が国民に終戦を告げた8月15日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」としている。この日は、終戦記念日と称し、全国戦没者追悼式や政治団体、NPOなどによる平和集会が催されている。

しかし、戦後64年、戦争という出来事は遠い過去となり、風化されていくのも現実である。今回は、辛く苦しい戦争時代を過ごした一人、和田在住、笠原美雪さんの体験を紹介。

三十八度線突破
北朝鮮からの脱出

笠原（かさはら）　美雪（みゆき）さん（91歳）

わたしの出身は山形県鶴岡市、酒井氏十三万八千石の城下町です。藤沢周平が生まれた町でも有名で、『蝉しぐれ』『武士の一分』など、映画やテレビ作品でも知られている町です。

昭和十五年、当時二十二歳のわたしは和服の仕立物をしていましたが、戦争中の事で注文が少なくなっていました。そのころ、北朝鮮の道庁に勤めていた従兄から「向こうなら仕事をもらって和裁ができる」と聞き、従兄夫婦を頼り、同年単身、清津という町に渡りました。

仕事にも慣れ、生活も落ち着いた昭和十七年、従兄の紹介で警察官だった主人と結婚し、羅南という町で所帯を持ちました。当時主人の給料は十七円で、内地の平均七円に比べると良い待遇でした。そこで二女をもうけ、食糧事情は良くありませんが、官舎住まいでもあり幸せな結婚生活を送っていました。

昭和二十年八月九日、見慣れない飛行機が飛んでいるのを隣人と見上げながら「いつものB29ではない」と気付きましたが、今とは違い情報のない時代のこと、すぐにはその意味がわかりませんでした。まもなく号外が出てソ連の宣戦布告を知りました。当時、ソ連と日本の間には不可侵条約が結ばれており、誰もソ連が攻めてくるとは予想していませんでした。その頃すでに日本の敗戦は確実となり、これからどうなるのか不安でした。

わたしはまだ羅南におり出張中の夫と連絡が取れないまま、とる物もとりあえず、二人の娘と米三升、鍋、塩、おむつを持って非難しました。三歳の長女はおんぶし、生後半年の次女を抱いての移動。まだ、自分たちの状況がわかっていないため、避難と言っても再び帰って来られると思っていたので、大切にしていた着物などは茶箱に入れて、畳を上げ床板の下に隠しておきました。

羅南から無蓋列車に乗り、二日程かけて南下し威興に着きました。途中の停車駅で日本人からおにぎりをもらい感激しました。威興には日本人学校があり、各教室に別れて避難生活をしました。学校のすぐそばには日本人の建てた神社があり、今まで日本人に迫害を受けていた現地の人々が、目の前で神社や日の丸を燃やし、とても怖い思いをしました。そんな時、子どものいる人はそれぞれギュッと抱きかかえ、口を真一文字に結び、嫌がらせをする人たちと目を合わせないようにして身構えました。

日本人学校を後にし、次は西本願寺へ移動しました。そこでは一人につき米一合ずつもらいました。わたしは子どもの分も含め三合です。そこでは、発疹チフスが発生し、四十度の熱にうなされて騒いだり、うろうろしたりする人たちも多くいました。今日は一人、明日は二人と次々に息を引き取る

昨日のことのように戦争時代の話しをする笠原美雪さん